

中国屈原学会国際討論会参加の記

竹 治 貞 夫

屈原は前四世紀戦国時代の楚国の貴族に生まれ、若い時から懷王の信任を得て要職に就き、敵国秦に対抗して活躍した。しかしやがて反対派に讒言されて失脚し、楚朝を追われた。この時に詠じたのが「離騷」という長篇詩で、中国文学史上不朽の名作となっている。その後江南地方に流されて各所を放浪していたが、前二七八年楚都が秦軍に攻め落とされた悲報を聞き、祖国の前途に絶望して、五月五日汨羅江に身を投げて死んだ。

六世紀ごろの文献である『統齊諧記』や『荆楚歲時記』によると、わが国にも伝わっている端午の節句の粽とペーロン競漕は、屈原の霊を弔うことから起こった習俗であるという。即ち屈原の身投げを聞いた村人たちは、急いで早舟をこぎ出して救おうとしたが間に合わなかった。そこでこの日を記念して、細長い早舟をこぐレースが始まった。今の中国ではこれを竜舟賽（賽は競争の意）と呼んでいる。長崎地方のペーロンは、飛竜または白竜の中国音がなまったものといわれる。また村人たちはこの日食物を川に投げこんで屈原の霊を祭ったが、ある時彼の霊が現れて、「せっかく私に供えてくれる食物が、淵に住む悪竜のために皆奪われてしまうので、これからは竜の嫌うちが

やの葉で包んでください」と言った。それから粽を作って供える風習が始まったという。

このように粽とペーロン競漕で民衆に親しまれてきた屈原は、憂国の大詩人として今日なお中国人民の尊敬の的となっている。中国の学界では、六年前の一九八五年に全国的な組織として中国屈原学会が成立し、毎年屈原と楚辞に関する活発な研究討論が行われている。

今年（一九九一年）の六月十六日は、旧暦の五月五日にあたる端午の節句であった。汨羅江の流れる湖南省の岳陽地区では、この日を中心にして国際屈原學術討論会と国際竜舟賽という、二つの国際行事が催された。屈原学会が国際討論会を開催するのはこれが初めてであり、私は学会の招待を受けてこの討論会に参加し、ついでに竜舟賽の盛大な開幕式を見物することができた。

大阪空港を出発して会場の岳陽市に到着するまでに、交通機関の接続のため上海および長沙で各一泊し、三日を要した。討論会は日本・ソ連・カナダ・香港等の外国学者十一名を含む九十余名が参加して行われたが、日本からは私のほかに五人の若い研究者（うち三名は北京大学等に留学中）の参加があった。

私は『楚辞研究』『楚辞索引』『屈原』の三書の著者として、また古希を越えた高齢の参加者として熱烈な歓迎を受け、十四日の開幕式には式上講話者の一人に選ばれた。私はこの機会を利用して、日本における楚辞研究の歴史と現況を紹介し、湖南大学講師李女史の明快な通訳をまじえながら、与えられた十五

分の時間いっぱい話したところ、後で多くの中国の学者から有益な内容で感銘を受けたと好評された。

その夜「書画連誼」という文墨の雅会があり、私は詩の腹案を練りながら定刻に出席した。すると屈原学会会長の湯炳正氏と共に、最初に並んで揮毫するよう求められ、次の「甲屈原」の一首をしたためた。

屈宋辞章憂憤多

(屈宋の辞章憂憤多し、

扶桑後学久吟哦

扶桑の後学久しく吟哦す。

何人感慨与吾等

何人か感慨吾と等しき、

端午悲風滿汨羅

端午の悲風汨羅に満つ。)

十五日は三つの部会に分かれて各自の論文を発表し、それぞれについて討議が行われた。私は、古来著者不明とされ、近時余嘉錫氏によって南唐の王勉著とされるようになった「楚辞积文」の書は、実は唐の陸善経の著作であるという自説を、わが平安朝の藤原佐世著「日本国見在書目録」と、金沢文庫(横浜市)に伝存する「文選集注」を主な資料として論証した。中国では見られないこれらの資料のコピーを示しながら説明した結果、湯炳正会長をはじめ諸家も賛意を表明してくれた。次の夜師大図書館から揮毫を求められたので、この日の発表を記念し「楚辞积文の撰者を論ず」と題する一詩を書いた。

佐世録書亡籍森

(佐世の録書は亡籍森たり、

善経選注価千金

善経の選注は価千金。

論文口演甚明晰

論文口演して甚だ明晰なり、

实事求是我心

実事に真を求むるは是れ我が心。)

帰国後、湯炳正会長から頂いた手紙の中に、

先生の学術論文「楚辞积文の撰者」、以為「楚辞积文」当出陸善経之手。考証詳尽、結論可信。先生発前人所未発、実楚辞学史之功臣。此論文、我已請人翻訳出来、準備在大学学報上发表。

(先生の学術論文「楚辞积文の撰者」は、以為へらく「楚辞积文」は当に陸善経の手に出づべしと。考証詳尽にして、結論信ず可し。先生は前人の未だ発せざる所を發し、実に楚辞学史の功臣たり。此の論文は、我已に人に請ひて翻訳出来し、大学学報上发表せんと準備す。)

との評言があり、更に氏は最近「楚辞文献叢書」を主編することになったが、その中に日本伝存の「文選集注」騷部を編入する予定であると報ぜられた。これで私の主張が中国においても定論化することと思われ、今回の学会参加は私にとって極めて意義深いものとなった。

十六日の午前で討論会は終了し、閉幕式が行われた。午後は国際竜舟賽の開幕式見学である。洞庭湖の一部である南湖の入り江が会場で、周囲に横たわるなだらかな丘が自然の観覧席となり、約二十万と報ぜられる観衆がこれを埋め尽くしていた。空は厚い雲に覆われていて暑くはなく、絶好の見物日和であった。国際と銘うただけあって、日本・英国・マレーシア・オーストリア・香港・台湾等の外国勢も加わって全部で二十八チーム(うち七チームは女子)という。日本からは当地と姉妹関係を結んだ滋賀県と鹿児島市の両チームが、はるばると参加していた。

私は学会の長老数名とともに「嘉賓」として、本部席に招待された。隣席は中国友好協会の孫平化会長で、日本語で話し合うことができた。竜舟を日本ではペーロンと呼んでいますと言うと、氏は手帳を出して片仮名でメモしていた。竜舟は漕ぎ手が片側に十人ずつで計二十人、へさきに据えた太太鼓と中央につるした銅鑼にそれぞれ打者がついて打ち鳴らし、ともに舵取りが乗っている。最初に一そうずつの札漕があり、後に数そうずつの競漕が行われた。その間に様々なイベントがくりひろげられ、各企業の趣向をこらした山車の舟が出て、水上をいろどった。十七、八の両日は、優勝をかけて各チームの熱戦が展開されるという。

学会は十七、八の両日を史跡の見学に当て、十七日の朝はまず汨羅の屈原廟に向かった。私は二度目の訪問である。汨羅は岳陽から約九十キロ南にあり、前回は悪路に悩まされて三時間近くかかったが、今度は道路がすっかり舗装されていて一時間余りで到着した。廟は屈子祠とも三閭廟とも呼ばれ、汨羅江岸の玉箭山という丘の上にある。記念館には私の著書「屈原」も展示されており、新しく日本各地から贈られた粽が飾られていた。私は汨羅江を見おろす独醒亭に腰を下ろし、半世紀に近い自らの楚辞研究を回顧してしばし感慨にふけった。「再訪屈原廟」、

研学半生呈屈原
許多論著慰幽魂

（研学の半生屈原に呈げ、
許多の論著幽魂を慰む。）

汨羅江畔薰風季

汨羅江畔薰風の季、

再仰三閭祀廟門

再び仰ぐ三閭祀廟の門。

昼食は市長の招宴にあずかり、本場の粽を味わった。小さな細長い三角錐の形で、先が鋭くどがつており、中の粉もちは小豆の入ったものや、色々な味のついたものがあつた。ちがやがよく乾燥させてしっかりと包んであり、日本のように生の葉は用いないとのことであつた。午後は岳陽に引き返して、岳陽樓に登った。三層の飛檐は壮麗優雅の極致で、樓上からは洞庭湖が一望され、まさしく天下随一の名楼である。

十八日は洞庭湖中の名勝、君山に遊んだ。ここには屈原の「九歌」に見える、湘君・湘夫人の二妃を祭った二妃廟がある。二妃は南方に巡幸した舜帝の跡を追うて来たが、この地でその病死の報を聞き、悲しみの余り水におぼれて死んだ。その涙が竹に注いで、幹に斑点のある斑竹となったという。昼食のレストランでまた揮毫会があり、私は折からの小雨を二妃の涙に見立て、「初渡洞庭水、君山淚雨時」（初めて渡る洞庭の水、君山淚雨の時と、即興の二句を書いた。帰ってから「湘靈哀怨跡、斑竹永年滋」（湘靈哀怨の跡、斑竹永年に滋る）の二句をつけ足して、「君山即事」の五言絶句ができた。

帰途は飛行便の関係で長沙市に二泊し、この地の有名な史跡岳麓書院と馬王堆漢墓を、ゆつくりと見学することができた。

（たけじ・さだお 本学名誉教授・徳島文理大学教授）